

賢い女やさしい女

畑山 博



賢い女やさしい女

定価八八〇円

昭和五十三年四月十五日 第一刷発行
昭和五十三年五月二十日 第二刷発行

著者 畑山 博

発行者 大沼 淳

発行所 文化出版局

東京都渋谷区代々木三の二の一
郵便番号 一五一

電話 (〇三)三七〇一三一(代表)

振替 東京二一九五六七〇番

印刷所 カバー・表紙 文化カラー印刷

本文 大日本法令印刷

製本所 明泉堂

0095-700410-7368

© Hiroshi Hatayama 1978

序

「さびしかったら、誰かを見つけて二人で生きてゆくのもいい。
でも、もっと淋しかったら、たった一人で生きてゆこ……」

いつだったか、ぼくは、新潟のある雪深い町での恋愛論の講演を、そんな言葉ではじめたことがあった。

何かに向かってアタックしてゆくことの得意な女性よりも、ぼくは、もう少し内気で、静かにものを「知る」ということの好きな女性に親しみを感ずる。

だから、この本も、たぶんそういう女性が手にとってくれるのだろうと思う。

誰かと二人で生きてゆきながら人生を考えたいというひとには、男がどんな女性をオアシスとして求めたがっているのかというその秘密を。

自立を人生観の核として生きてゆこうと秘かに決めている人には、女性の側から見るのとはまた違う少しきびしい男の側からのアドバイスを。

賢い女やさしい女
目次

序 1

第一章 愛の実像、品のいいテクニク 9

目に見えないライバル 11

あの夏の日のまぶしい海 21

ジェラシーがプライドを傷つけるとき 32

嘘は上手に育てること 41

愛の不安を上手に育てる法 48

バージニティについて 55

シンデレラだったK子の場合 65

第二章 女性のほんとうの魅力 77

聡明な女性と美醜 79

恥じらいの美学 85

○女性のほんとうの魅力とは 93

第三章 結婚について 107

結婚で女性は何を得るか 109

結婚で女性は何を失くすか 119

友だち夫婦はどこへ行く 129

男に結婚をためらわせる条件 139

第四章 別れの美学 147

未練じょうずな女とは 149

さわやかな別れ 160

崩れゆく友情 170

第五章 都会の孤独そして旅 181

ゆらめく心 183

女だからこそ・都会の孤独 193

旅という言葉に託す思い 203

第六章

一人で生きる

215

それでも一人で生きてゆく

217

ライフワークとの出逢い

227

紬に織り込む人生模様

237

あとがき

251

装幀 上野憲男
撮影 落合泰三

賢い女やさしい女

第一章 愛の実像、品のいいテクニク

目に見えないライバル

初めのテーマは、まず恋のライバル。

でも、ぼくは、いきなり女同士の激しい恋の奪い合いのことを書こうというのではない。

目の前に強い恋がたがいて、はつきりと姿が分かっている場合だったら、それはそれであるが、いかに作戦を考えることも出来る。

でも、恋のライバルが、いつでも目の前に、はつきり姿をさらすとはかぎらない。

それどころか、自分に隠れたライバルがいたことにすら気づかずに、いつの間にか静かに恋を失くしてしまうときだってある――。

R君（二十六歳、大手の建設会社勤務、寮ぐらし）は、S子が新入社員として入社してきたときから、魅力のあるコだなあと、目をつけていた。S子は、小柄だが色白で、ほっそりとしたからだ

と、甘いいい声をもった娘だった。

「わたし、あみものが好きなんです」

歓迎コンパで自己紹介したS子に、R君はさっそくモーションをかけはじめた。

好きな女のコに近づくには、まず趣味を合わせよ——恋愛テキスト第一章。でも男のR君にはあいにく、あみものに熱意をもやす準備はない。で、仕方なく「君の趣味の二番目は何さ？」ときいた。

「読書です」

S子は言った。読書ならぼくもだなあと、R君は嬉しくなった。

「きょう、本買う日なんだけど、いっしょに行かないか……」

ごく自然な感じでR君は、S子をデートに誘うことができた。

幸いS子も、知的なR君に好感をもった。二人の心は急速に近づいていった。

というより、好きと思い深めてゆくスピードが、どうやら途中からS子の方がずうっと早くなくなってしまったようだ。

二人で同じ本を買ってもしようがないから、どちらかが持っている本は貸しっこしようということになった。するとS子の方がずっと本持ちだったので、貸すのはいつもS子ということになった。

R君に本を貸すことが、S子はとっても嬉しそうだった。そのうちR君は、あることに気がつ

いた。S子が貸してくれる本のページの余白に、いつも一言、書きこみがしてあるのだ。そうしてそれはいつだって、本の中身とはぜんぜん関係のない言葉。

“知的な人間の心の秘密は、愚かな者のそのようには、いつまでも隠しおおせない”

“鉄は熱いうちに打て”

“女の幸福とは、誘惑者に出逢うことである”

そう書かれていた日、R君は首をかしげかしげ、ぼくのところに相談にきた。

「これ、どういふことなのかなあ」

ため息まじりに彼は言った。

「ばかだなあ。謎々じゃないか。彼女は君をじれったがってるんだよ。早くキスをしなけりやだめじゃあないか」

ため息まじりでぼくは答えた。ああそうか、そうなのかあとR君がうなずきながら帰ってしばらくして、こんどは彼女にセーターを贈られましたと言ってきた。

でも、知的な男によくあるタイプ。かんじんな場面にさしかかると、どうもR君は内気に転じてしまふ癖があるようだ。とうとう冬を越し春を越して次の年の夏になるまで彼は、ぜんぜん恋を進めることができなかった。

でもその夏、とうとう彼は決心して、S子を海水浴に誘ったのだ。

S子はとても嬉しそうだった。新しい水着を買って、ほったを上気させて、彼女は約束の駅

まで電車でやってきた。そうしてそこへR君が車で迎えに行つて、二人で目当ての湘南の海水浴場までドライブしたのである。

「人のこまない、きれいな海を探して、二人きりで泳ぎたいね」

と、ロマンチックな気分は大いに盛り上つていた。が、大磯から東伊豆の海岸までドライブしても、きれいな海を見つけることはできなかった。

いや、ほんとうは泳げそうな海は何度かあったのだけれども、人ごみがすごかったり、二人が願っているほど澄んでいなかったりで、とうとう水着に着かえる気持になれなかった。

そうして日暮れ。あんなに朝早く東京の街を出てきたのに、もう日暮れ。二人は帰り道を走り出さなければならなかった。

帰り道。S子はひどく言葉少なになっていた。東伊豆から大船までくる間に彼女が口を開いたのは、たった一言。

「わたし、あなたがわたしに対して何々してくれていうふうに頼んだことがないのが、とても淋しい」

という言葉だけだった。そしてそう言いながら急にぼろっと涙を見せたのである。

そんなS子に向かつて、R君は何を言っているのか分からなくて、だまっていた。だまっていたしきりにアクセルを踏む力を弱めてみるだけだった。

大船。そこからはR君は道を分かれて横須賀にある会社の寮に帰る。そうして彼女の方は電車

に乗りかえて埼玉県の所沢まで帰るのである。朝出かけるときからそういう約束だった。

言いたいことがまだいっぱい残っていそうな気持を抱いたまま、いったん二人は駅前で別れた。早朝からのまる一日中の運転で、R君はひどく疲れていた。できるなら自分も横須賀まで電車で帰れるならいいなと彼は思った。

でもそのとき、いったん別れたはずのS子がつぜん戻ってきたのである。

「わたしを所沢まで車で送って行って」

会社の誰々ちゃんは誰々さんに送ってもらったのよ何々のとき、と言ったことを、早口で彼女は言った。

R君は、ふたたびS子を乗せて走り出した。休日の帰りの車でこつた返す東京の街をぬけ、所沢へ着いたときはもう夜の十時半だった。

家の前に着くと、S子は

「ちょっと待っててね」

と言って玄関の中へ入っていった。昼から二人とも何も食べていなかった。何かおにぎりでも作って持たせてくれるのかなと、ふと彼は思った。

それなのに、出てきたS子の母親は言ったのだ。

「遅いから泊まってらっしゃい」

それはS子とその母親にとっては最大限のねぎらいの言葉のつもりだったのかもしれない。R